

2 山ノ神遺跡

都留市田原字山ノ神

遺跡の立地

都留市の南西にそびえる御正体山より北西に張り出した尾根の末端部、北向きの斜面に立地する。遺跡の東西両側には沢が形成され、わずかであるが清流が認められる。遺跡の前面には桂川右岸の河岸段丘が広がっている。遺跡は、都留文科大学テニスコート脇の宅地造成地付近に所在する。



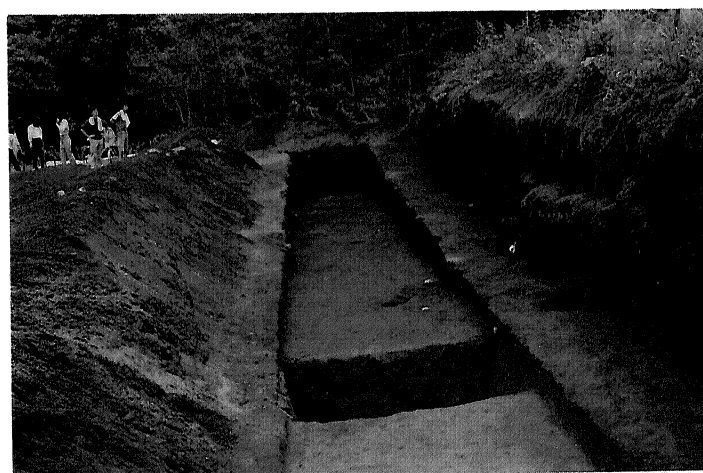
第1図 遺跡の位置

遺跡の調査

遺跡の第一発見者は、都留文科大学地学研究室の上杉陽教授であった。昭和55年（1980）5月22日にたまたま、宅地造成工事によって削り取られた遺跡の切り通しの地質調査を行っていたところ、その土層中に多量の土器片が包含されていることを発見した。この連絡を受けた市教育委員会では、さっそく都留文科大学考古学研究会の会員と同地の踏査をおこなったところ、上杉教授が土器片を発見した切り通しの土層中及びその周辺から、縄文時代前期諸磯B式土器の破片がかなりまとまって認められ、また、第3図の黒曜石製の大型石槍を採取した。

そのため、造成工事の業者と協議し、5月27日から6月7日までの2週間にわたって、切り通し面及び、その前面の調査を実施することになった。

発掘調査は、切り通しに沿って2m×2mのグリッドを設定し、西側からA1～A12グリッドと命名した。



第2図 遺跡全景

遺跡の層位

遺跡の標準土層は9層に分けられた。

第I層 黄褐色土層（2次堆積土）

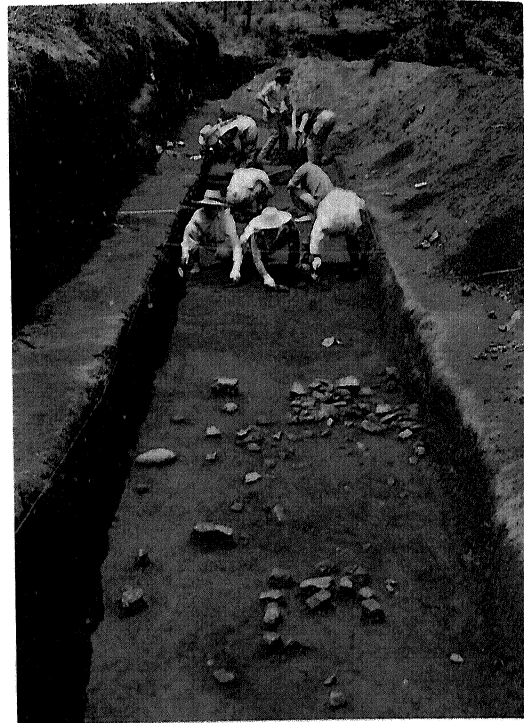
第II層 暗褐色土層（砂礫・2～3mmのスコリアを含有する。）

第III層 黒色土層（黄褐色スコリアブロックを点在する。）

第IV層 黒灰色スコリアを含有する。



第3図 山ノ神遺跡出土の石槍



第4図 調査風景

- 第Ⅴ層 暗褐色土層（スコリア・茶褐色ブロック含有した土層で（諸磯B式土器の包含層である。）
- 第Ⅵ層 茶褐色土層（諸磯B式土器の包含層である。）
- 第Ⅶ層 暗褐色土層（条痕文系土器・沈線文系土器・押型文系土器の包含層である。）
- 第Ⅷ層 黒褐色土層（F・B層で、沈線文系土器・押型文系土器の包含層である。）
- 第Ⅸ層 ローム漸移層

遺構

グリッド調査は、すでに工事で第Ⅴ層まで削平されていたために、第Ⅵ層から掘り始めたところ、第Ⅵ層面では、A 2～A 8 グリッドを中心に比較的小さな礫の散在が認められ、また、土壌が4基検出された。

第1号址

第1号址は、A 6 グリッドにおいて発見され、長軸1.1mの不整形プランを呈し、確認面からの掘り込みは10cmと浅く、覆土中より2～4cm大の炭化物がかなり濃密に認められた。また、覆土より諸磯B式土器の破片が検出された。

第2号址

第2号址は、A 7 グリッドにおいて発見され、長軸1.6mの不整形プランを呈し、確認面からの掘り込みは30cmであった。覆土中及び上面より焼土・炭化物・礫が濃密に検出された。

第3号址

第3号址は、A 3 グリッドにおいて発見され、長軸70cmの円形プランを呈し、確認面からの掘り込みは浅く、覆土中及び上面から小礫が検出された。

第4号址

第4号址は、A 4 グリッドにおいて発見され、南側半分しか調査できなかったために、全貌を明らかにすることはできなかったが、直径1.1mの円形プランを呈するものと思われる。

遺物

出土遺物のうちで、土器に主眼を置いて述べることにする。山ノ神遺跡の出土土器は、次のように類別することができる。

第Ⅰ群土器（第6図1）

弥生時代後期の土器である。

第Ⅱ群土器（第6図2・3）

縄文時代後期の土器群である。堀之内1式期に既当する。

第Ⅲ群土器（第6図4～18、第7図17～49）

縄文時代前期の土器群である。諸磯B式期に既当する。

第Ⅳ群土器（第8図51・52、第9図53～58）

縄文時代早期の土器群である。条痕文系土器。

第Ⅴ群土器（第8図50）

縄文時代早期の土器群である。沈線文系土器で、田戸下層式期に既当する。

第Ⅵ群土器（第9図59～72）

縄文時代早期の土器群である。押型文系土器。

第Ⅶ群土器（第10図73～95）

縄文時代早期の土器群である。捺糸文系土器に既当するが、一部に草創期の多縄文系土器群が含まれているようである。

以上の第Ⅰ群から第Ⅶ群の土器を、層序ごとに説明する。

第Ⅱ層

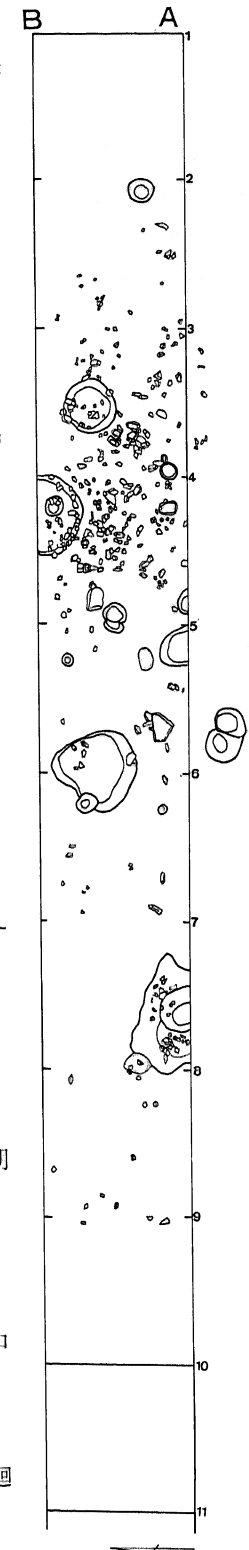
第Ⅱ層からは、第Ⅰ群土器が出土した。1は、弥生時代後期の甕形土器の口縁部と思われる。

第Ⅲ層

第Ⅲ層からは、第Ⅱ群土器が出土した。2・3は口縁部に一条の沈線文を廻らしている。

第Ⅳ層

第Ⅳ層からは第Ⅲ群土器（第6図4～16）が出土した。弧状沈線文などの沈



第5図 山ノ神遺跡全体図

考古

線文を主体とするもの(4・5、10~12、15)、浮線文を主体とするもの(6~8、13・14)、縄文のみを施文するもの(9)などが見られる。

第V層

第V層からは、第Ⅲ群土器(第6図17・18)が出土した。沈線文を配するもの(17)、浮線文を配するもの(18)が見られる。

第VI層

第VI層からは、第Ⅲ群土器(第7図19~46)が出土した。19~21は、有孔鏝付土器。浮線文を主体とするもの(22~28)、細沈線文のみ施すもの(29・30、44~47)、弧状沈線文などの沈線文を主体とするもの(31~36、38・39)、半截竹管文を施すもの(48・49)、縄文のみを施すもの(40・43)などがある。

第VII層

第VII層からは、第Ⅳ群土器(第8図51・52、第9図54~56)と第Ⅴ群土器(50)、および第Ⅵ群土器(第9図59・60、66~69)が出土した。第Ⅳ群の条痕文系土器は、胴部破片のみであるために時期の決定が難しいが、おそらく茅山上層式に比定されよう。第Ⅴ群土器の(50)は、第VII層から第VII層にかけて混在していたが、第VII層に帰属できる。口唇部に矢羽根状の沈線文をめぐらし、直下から、沈線文と竹管による片突きの円形刺突文を交互にめぐらしている。褐色を呈し、堅緻。第Ⅵ群の押型文系土器は、59・60の楕円押型文と、66~69の山形押型文がある。第9図62~65は第VI層、70~71は第VII層、72は第IX層であるが、ほぼ同一個体と思われ、その帰属も第VII層にあると考えられる。59・60は、やや粗大の楕円押型文である。66~69の山形押型文は、雲母を多量に含有し、薄手である。縦位の山形文であるが、62などを見ると、口縁部付近に数条の横位山形文が施されるタイプであると思われる。

第VIII層

第VIII層は、第Ⅵ群土器(第9図61・70~71)、第VII群土器(第10図73・79・83、85・86、88、97)が出土した。第VII群の撚糸文系土器であるが、第VI層(74、76・77)、第VII層(81・82、84・85)からも見られたが、中心は第VIII層になろう。ひとくちに撚糸文系土器と言っても、詳細に検討すると縄文原体にバラエティがあることに気付く。しかし、口縁部の資料が少ないので時期の決定は難しい。

第IX層

第IX層は、第VII群土器(第10図80、89~96)が出土したが、94・95・96などは撚り紐を押し当てただけの、いわゆる押圧縄文土器に属する可能性がある。赤褐色を呈し、非常に脆い。

成果と課題

本遺跡の調査によって、縄文時代前期諸磯B式期の土壌を4基検出した。この土壌は、覆土上面に小礫及び焼土・炭化物が濃密に認められ、また、覆土中から諸磯B式の土器片とともに小礫が検出されている。第1号址に近接するA5グリッドの土壌の確認面において珧状の耳飾が検出され、これは土壌に伴う副葬的な性格を帯びたものではないかと想像している。

本遺跡の調査目的には、第3図の石槍の出土層を明らかにして、これに伴う資料を得ることが含ま

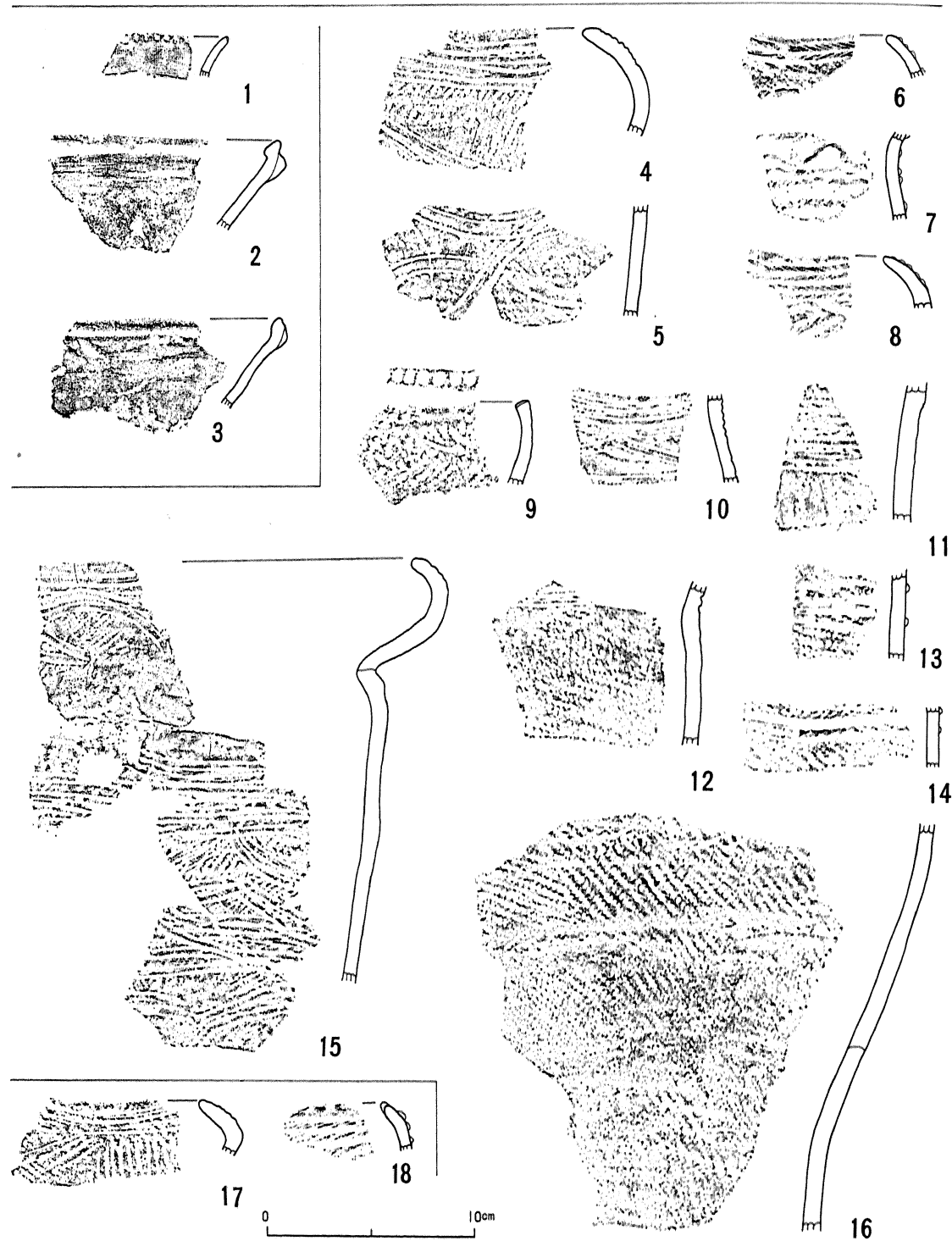
れており、ローム層中の調査を実施したが、文化層は検出されなかった。

この石槍について、当初、先土器時代のポイントではないかと考えたが、採取地点周辺において、ローム層中に文化層が認められない点や、この石器自体を良く観察すると、鋭利さをそぐかのように先端部が打ち欠かれている点などから、用途としては両側縁の刃部を主に使ったものと思われる。この所属時期であるが、遺跡の主体をなす縄文時代前期の所産として位置付けておきたい。

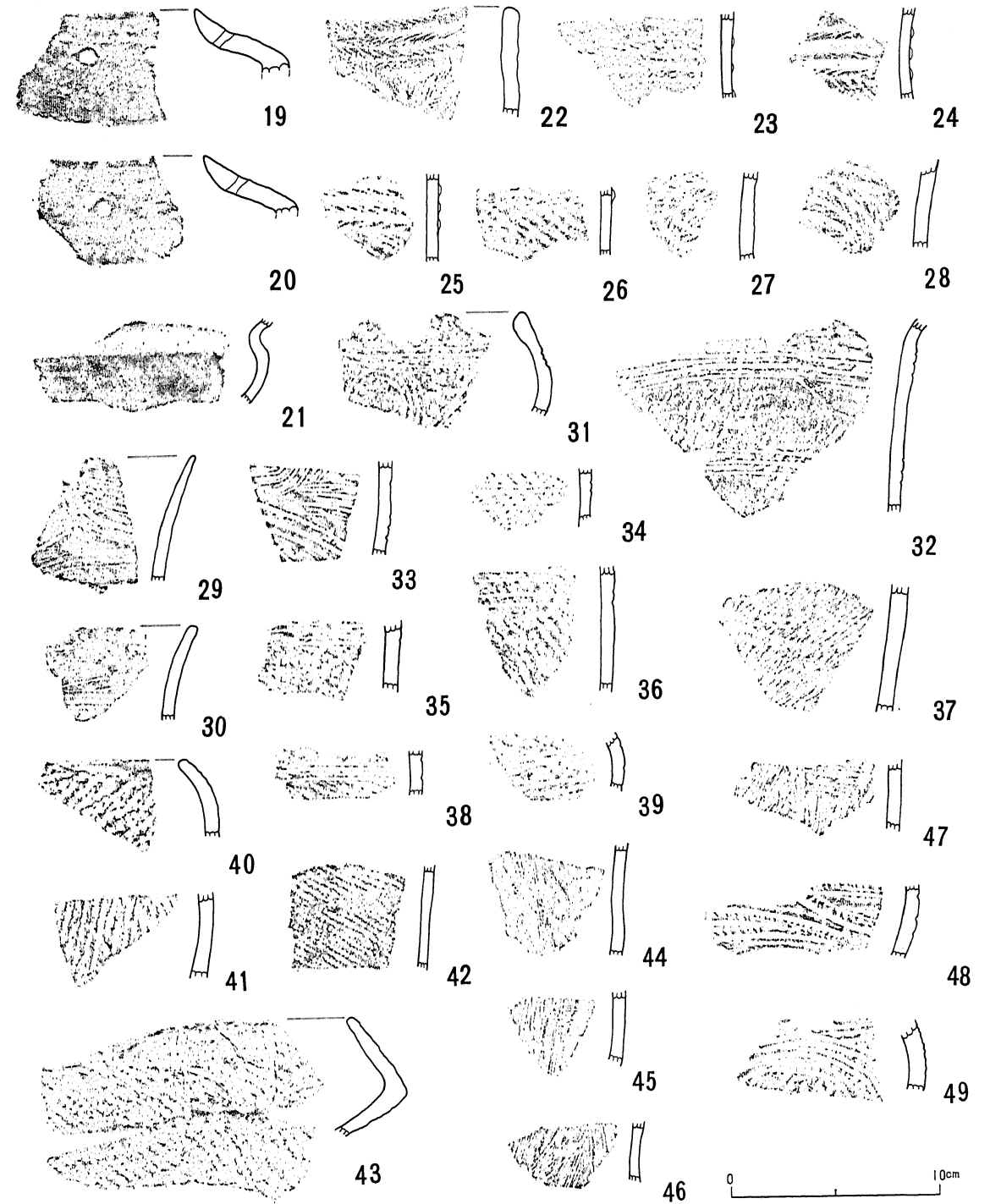
(喜多圭介)

遺跡の現状

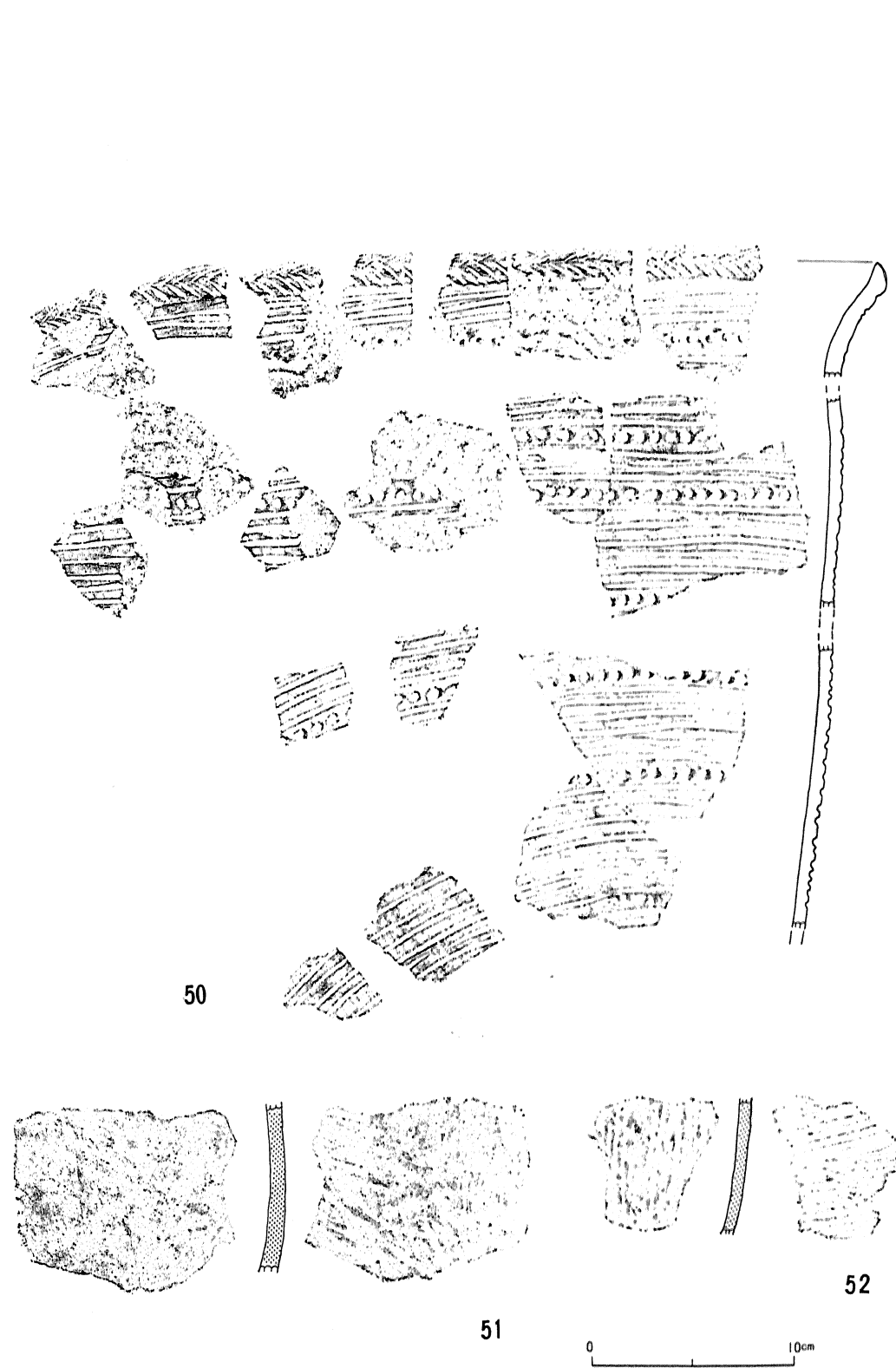
遺跡は現在新興住宅街となっているが、なお、山側に遺跡の広がりが想定される。



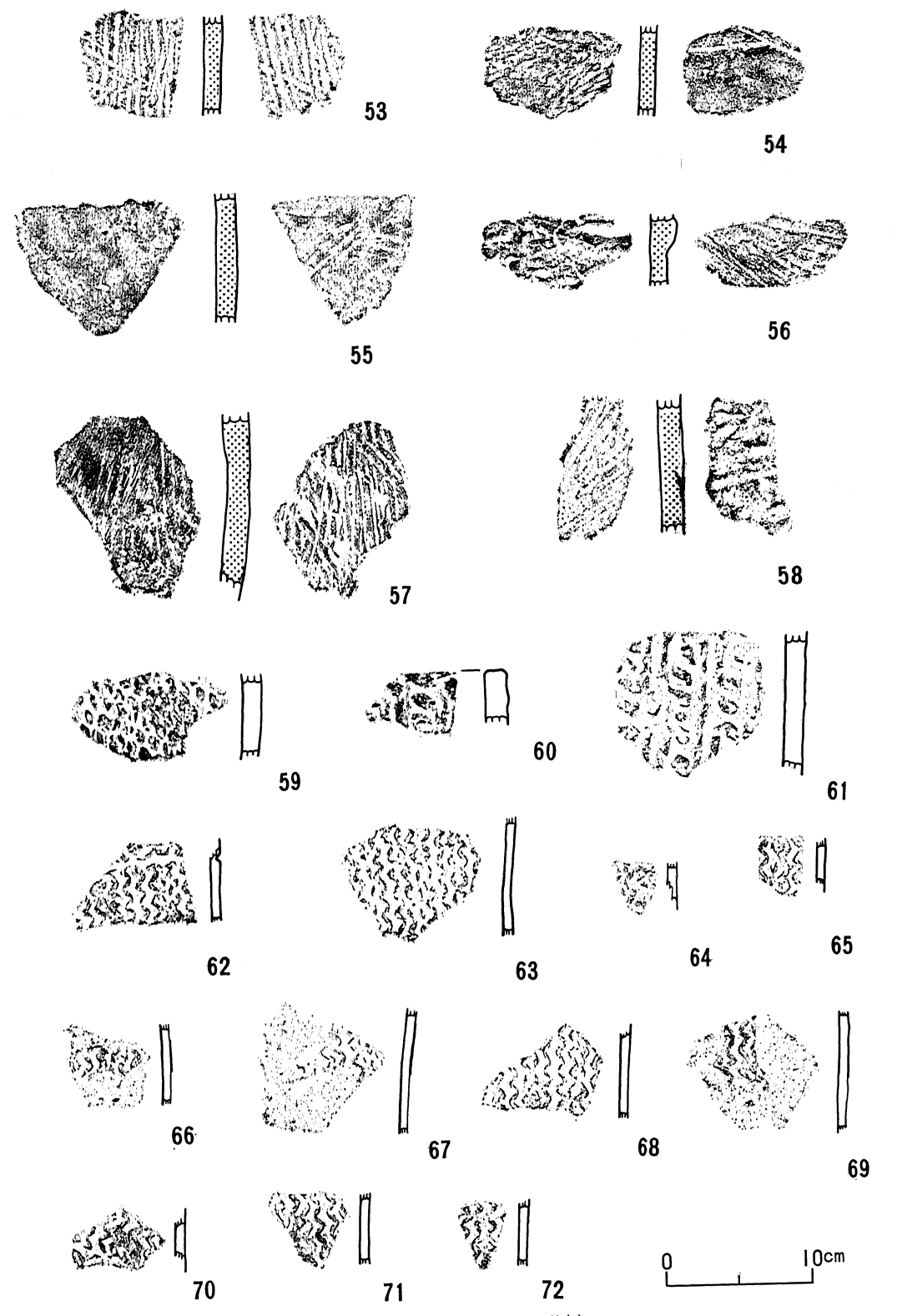
第6図 山ノ神遺跡出土遺物(1)



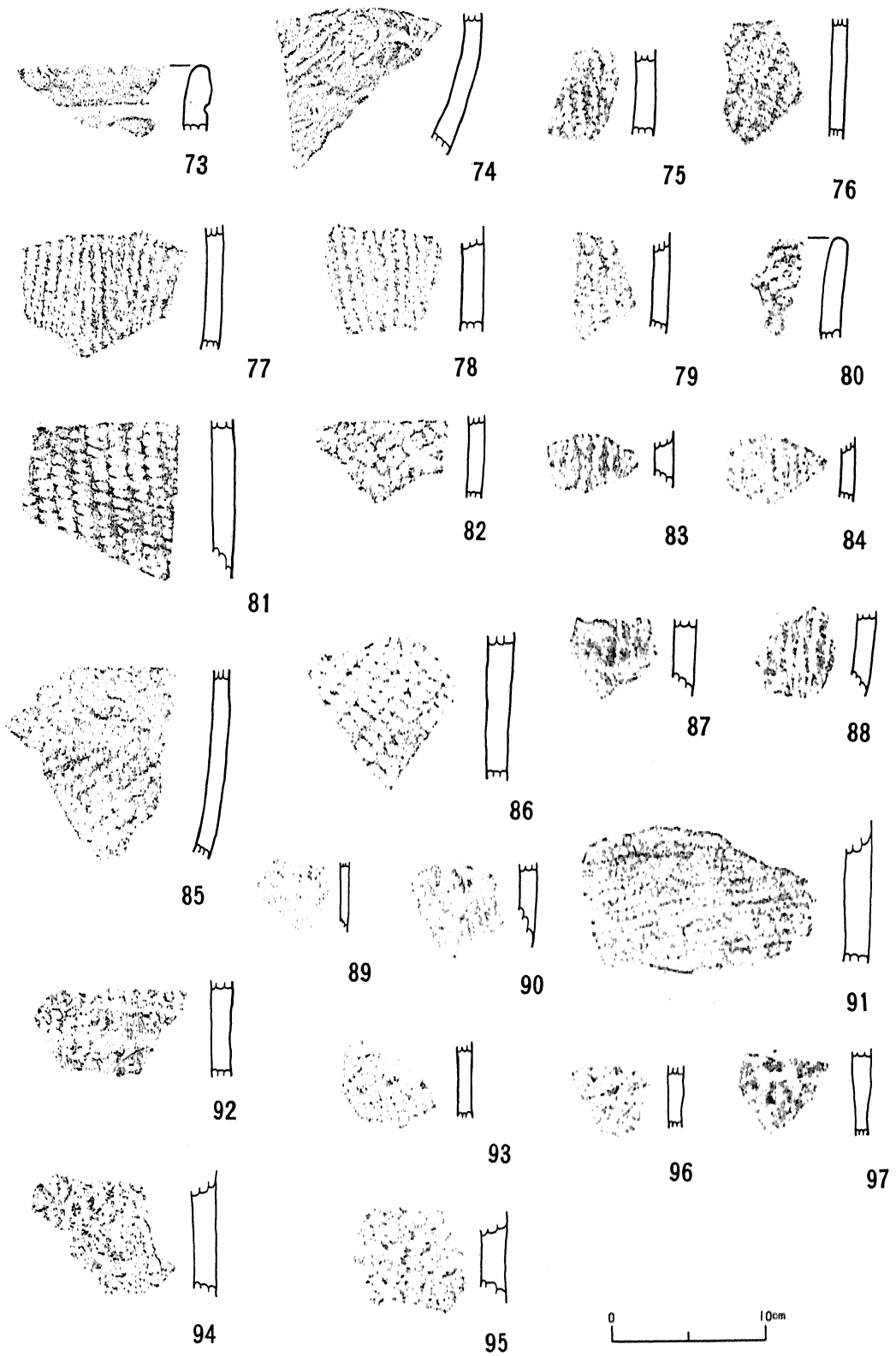
第7図 山ノ神遺跡出土遺物(2)



第8図 山ノ神遺跡出土遺物(3)



第9図 山ノ神遺跡出土遺物(4)



第10図 山ノ神遺跡出土遺物(5)